

子どもたちの周囲にある

慣習的な音楽行動

藤田芙美子

先回、八月号では、保育園〇歳児クラスの子どもたちの音楽的な探索行動と熱中、そしてそのような子どもたちの行動を励まし、援助している保育者に焦点をあてて、その実際を説明しました。子どもが保育者と相互に交渉しあって、じょうろの水が流れる様子を「ジャー」という擬音語で表現することができるよう

になる過程には、文化の伝達の本来的な形があると述べました。

保育園の低年齢児クラスの子どもたちの生活を注意深くみますと、子どもたちの周囲には、文化的に留意されたともいえるべき、慣習的な動作や言葉(慣用句)が豊かにあることに気がつきます。子どもは、そのよ

うな慣習的な動作や言葉を大人と取り交わし、さまざまな生活場面でこれを繰り返し経験することによって、知らず知らずのうちに、自ら音響を組織づける方法を学んでいます。

今回は、子どもたちの周囲にある、ごく日常的な行動のセットのいくつかをとりあげて、それらが子どもたちの音楽表現法を育てるためにどのような役割を果たしているかについて考えてみることにしましょう。

手を叩く、拍手する、手を打ち鳴らす

保育園の低年齢児クラスの日常生活には、保育者が子どもたちに向かって「手を叩く」という行為が頻繁に見られます。子どもたちもまた「手を叩く」保育者に注目し、この行為をいち早く習得して度々行うようになります。

「手を叩く」とは、誰もができる実に単純な行為です

が、子どもが「手を叩く」行為を習得する過程は、なかなか複雑で一筋縄ではいかないようです。周囲の大人は、生活の場面場面で「手を叩く」行為をさまざまな意味をもって使い分けているからです。子どもが「手を叩く」行為を学ぶいくつかの事例^注をとりあげて、その学習の道筋を追ってみましょう。

手を叩くー相手の注目をうながし、励ます

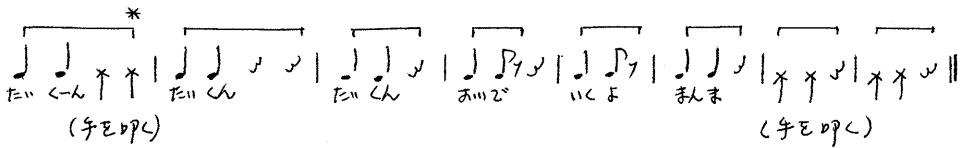
事例1 たいしくんの歩行活動 一九九七年四月三十日
お天気がよいので、保育園の子どもたちは、園庭を自転車で駆け回っています。その中を、〇歳児クラスのたいしくん(十一ヵ月)は、どんどん一人で歩いているようになります。たいしくんは、つい最近一人で歩けるようになったが、今日は、広い園庭をどこまでも歩こうという意気込みが感じられます。二歳児クラスの保育者がバイバイと声をかけると、手を振ったり、門の所まで歩いていって、外を眺めたり、歩くことで探索

の世界が広がるのが面白くて仕方がないといった表情です。そんなたいしくんを遠くから見守っていた、担任の保育者が「たいくーん」と呼び、手を叩きました。たいしくんは、すぐにその声に気がついて保育者の声のする方を見ました。保育者は今度はしゃがんで「たいくん、おいで、まんま」といって、再び手を叩きました(図1)。たいしくんは、保育者を見つけると嬉しそうに、につこり笑って、十五メートル程もある距離を急いで歩いて行き、保育者に飛びつきました。保育者は、たいしくんをしつかり抱き上げて、良くやったと褒めるかのように何度もたいしくんのおしりをトントンと叩きました。

事例2 しおりちゃんのお散歩 一九九七年六月十日
 先回、六月号でもとりあげましたが、梅雨の晴れ間の朝のひとつとき、○歳児クラスの子どもたちは、保育園の近くの並木道の散歩にでかけました。歩くことが

できるようになって間もないしおりちゃん(十三カ月)は、歩くこと自体が面白くて仕方がないようです。保育者や他の子どもたちとは別の方向に、一人でどこまでも歩いて行きます。近所のおばさんが、スタスタと歩いてくるしおりちゃんに気がついて、その場にしゃがんで、励ますように「しおりちゃん」と呼びかけて手を叩きますと(図2)、しおりちゃんは、急い

図1 保育者がたいしくんの歩行を励まして



*「——」は呼吸周期を示す

でおばさんに向かって歩いて行きました。

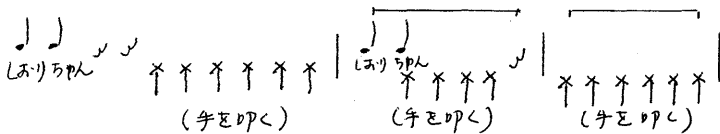
たいしくんを呼んだ保育者と、しおりちゃんを呼んだ近所のおばさんは、どちらも、一定のリズムにのって、子どもの名前を呼び手を叩きました。図1にみられるように、呼びかけと手を叩くという動作で作り出されたリズムは、4拍・4拍・3拍・3拍・2拍・3拍・3拍・3拍という、呼吸単位ごとのまとまりがあります。そして、保育者も近所のおばさんも、子どもが注意を向けやすいように、子どもの背丈にあわせて、しゃがんで声をかけました。

事例1と2は、私たち大人が日常生活の中で、歩き始めた子どもを励ますときに、しばしば「名前を呼び、手を叩く」というリズムミカルな行動を行うことをあらためて思い起こさせます。子どもは、大人が繰り返し与える、このような慣習的な行動のセットにその都度対応し、大人の反応を確認することによって、そ

の行動への反応の仕方を学び、さらには、自らも、誰かを励まして「呼びかけ、手を叩く」という慣習的な行動を起すことができるようになります。

私たちは、一九九一年から三年間にわたって、こひつじ保育園の三歳児クラスの子どもたちの音楽行動を継続して観察しましたが、四歳、五歳になりますと、子どもたちは、ハンカチ鬼や色鬼などのは、鬼ごっこを楽しむ回数が目だって多くなり、その際に、鬼に向かって「鬼さんこちら、ここまでおいで」（一九

図2 近所のおばさんがしおりちゃんの歩行を励まして



九二年八月十日、あやちゃん、五歳、(図3参照)あるいは「ここまでおいで、ペロペロバー」(同年九月七日、けいすけくん、五歳、図4参照)のような、やし言葉^{注2}を頻繁に唱えるようになることを記録しています。図4が示すように、このはやし言葉は、いずれも長二度からなるわらべ歌旋律で唱えられています。このようなはやし言葉は、相手の注目をうながし、行動を起こすことを誘うという点で、歩き始めた子どもを励ます事例1や2の慣習的な行動に近い意味合いを持つものと言えるでしょう。このような子どもたちのはやし言葉を聴いているうちに、私も子ども時代にも「おにさんこちら、てのなるほうへ」(図5)と、短三度+長二度+長二度の四音旋律で、はやしながら目隠し鬼を楽しんだことを思い出しました。伝承的な唱え言葉やわらべ歌は、このように、生活の中で、大人と子ども、あるいは子ども同士が、一定の状況のもとでのお互いの気持ちを伝え合おうと、言葉を動作を繰り返す

図3 鬼ごっこであやちゃんが鬼に向って

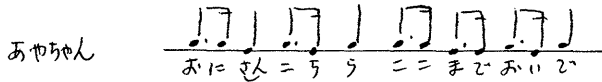


図4 子どもが二人組になって一人の両足を持ち上げて両手で前に進む競争で

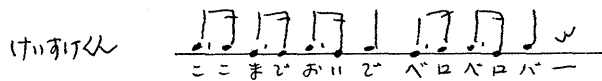
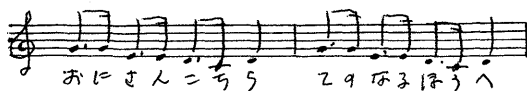


図5 鬼さんこちら、手のなる方へ



取り交わすうちに、次第に音程とリズムが定まって作り出されてきたのでしょう。

拍手する

— 相手が物事を達成したことを共に喜び励ます

○歳児クラスの生活には、保育者が、何らかの行動を達成した子どもを喜び励まして拍手をする場面が頻繁に見られます。保育者が拍手する時は、喜びに満ちた笑顔と励ましの言葉がつきものです。子どもは、楽しい雰囲気の中で行われるリズムカルなまとまりのある「拍手する」という行為を早い時期から注目しますが、生後十一カ月もなりますと、自分から拍手をするようになります。

事例3 リズミカルに名前を呼び、返事をする

一九九七年五月十九日

保育者が、保育室で自由に活動をしている子どもたち、一人一人の名前を呼び始めました。子どもが、自

分の名前を他の子どもの名前と区別して聞き分けることができるように、はつきりとした発声でリズムカルに呼びかけます「よねだなおとくん」(図6)、なおとくん(十一カ月)は、最初の呼びかけには答えませんでした。二回目の呼びかけには、一拍おいたあと、両手をあげて元気良く「はい」と返事をしました。そばにいた保育者たちは、初めて声と身振りで返事ができたなおとくんを見て大喜び、「よしよし」と声をあげて拍手をしました。それを見て、たいしくん(十一カ月)も、嬉しそうな表情で、先生たちと一緒に手を二回打ち合わせました。次に保育者は、たいしくんに向かって「まなかたいしくん、はい」と呼びかけました。たいしくんは、この呼びかけに手を三回打ち合わせることで答えましたが、保育者がたいしくんに求めた応答が「はい」という返事であることは理解できなかったようです(図6)。結局、この日返事ができたのは、なおとくんだけでした。たいし

くんは、保育者たちが、喜びの声をあげて拍手する様子をみて、拍手は嬉しいときにするものと考えたのかも知れません。誰かが、何か物事を達成したことを喜び、励ますという拍手の意味を子どもたちが理解するのは、三歳位になるまでは難しいことのようにです。

手を打ち鳴らす―歌や音楽の拍にあわせて

子どもが、最も早い時期から習得するのは、何といても歌や音楽のリズムに合わせて手を打ち鳴らす行為です。○歳児クラスのおとくんが「むすんでひらいて」の歌に反応して、身振りをし、手を叩くようになるまでを追ってみましょう。

事例4 「むすんでひらいて」の歌にあわせて、

手を叩く

昨年のお観察期間中、なおとくんが「むすんでひらいて」の手遊びを経験したのは、五月二十八日、六月二十五日、九月四日、二十四日の四日間でした。四日間

図6 リズミカルに名前を呼び返事をする

保育者
おとくん

保育者
なおとくん

(はーり 2+ (は))

(拍子可子)

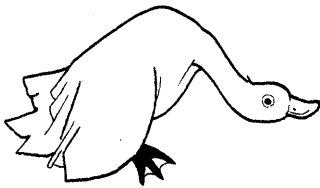
のうちの三日は、全園児がホールに集まってのお誕生日会でのことでした。

五月二十八日は、お天気が良かったので、なおとくん（十一カ月）たち七名の〇歳児クラスの子どもたちは、四人乗りのバギー二台に乗ってテラスからお誕生日会を見学しました。「むすんでひらいて」を元気に合唱し手遊びする年長児たちを、七名の子どもたちは、驚くほど集中して見つめていました。しゅんたくん（十一カ月）は、四番の歌詞「むーすーんーで」で両手を組み合わせ、「ひーらーいーて」で、組み合わせた手を上下に振り、「てーをーうって」はそのままだ動かず、「むーすんで」で、手を三回打ち合わせました。組み合わせた両手を上下に振るところ、手を打つところは歌の拍に見事に合っていました。

なおとくんは、「むすんでひらいて」の歌が終わり、保育者がお話を始めるとすぐに、「Aー、Aー」と声を出しながら、両手を上にあげて左右に揺らし、バ

ギーの手すりを叩き、手を三回打ち合わせました。その声の調子は「てーをーうって、むーすんで」を歌っているかのようであり、終わりの「むーすんで」にぴったり合ったリズムで手を打ちました。なおとくんの歌は、まだ言葉にはなっていないが、言葉のフレーズのまとまりと拍節をしっかりとらえていました。

六月二十五日のお誕生日会には、〇歳児クラスの子どもたちも全員ホールに集まり参加することになりました。なおとくんは、年長児たちが「むすんでひらいて」を歌い始めると、じつとその様子を見ていたが、歌の二番の「てーをーうって」になるやいなや、パチパチと音がするほど勢



いよく手を打ち始めました。三番になりますと動きを止めて歌を聴き、四番では、歌の拍節にぴったり合わせて身体を上下にバウンドさせました。

明治の昔から歌い継がれている手あそび歌「むすんでひらいて」に、〇歳児クラスの子どもたちは、大いに興味を示しました。しゅんたくんも、なおとくんも、この歌を二、三回繰り返して聴くと、そのリズム（拍節）を感じとってしまったようです。そして、そのリズムに合わせて、まず最初に、手を打ち合わせることが出来るようになりました。この歌は「むーすーんーで」「ひーらーいーて」のように、四拍をひと呼吸でまとめて歌い、このひと呼吸単位の歌詞内容にあった動作を拍に合わせて行います。生後十一カ月のしゅんたくんと、なおとくんは、年長の子どもたちが息を合わせ声を合わせて歌い動作するのに、自らの息を合わせ、声と動作をまとめることを試みました。生活のあらゆる場面で経験していた「手を叩く」という

運動動作は、特別に注意をひきやすく、まとめやすかったようです。

〇歳児クラスの子どもたちが、ごく日常的な「手を叩く」という動作をどのようにして学んでいくかを、四つの事例から考えてみました。四つの事例に一貫してみられたことは、子どもたちの生活には、言葉と「手を叩く」という動作が一体となったリズムカルな行動のセットを経験する場面が豊富にあるということ、そして、子どもたちはそのような行動のセットを経験する中で、呼吸を合わせ、声を合わせて、「手を叩く」という動作をまとめることを、生後十カ月そこそこから身につけ始めるといふことです。

今回は、まとまりのある動作や言葉を学びはじめ一歳前後の子どもに注目して、「手を叩く」という動作を学ぶことに関わる慣習的な行動のセットを取り上げましたが、これは、ほんの一例にすぎません。子ど

もたちの周囲には、乳児に対するあやし言葉（擬音語による語りかけ）にはじまり、さまざまな手遊び歌（げんこつ山のためきさん、さよなら三角またきて四角等）、そしてもつと複雑なゲームやわらべ歌（はないちもんめ、じゃんけん遊び、かくれんぼ、はじめの一步等）に至るまで、大人と子ども、そして子ども同士が相互に交渉する中で、音声を、動作を音楽的にまとめる方法を学ぶ慣習的な行動のセットが豊かにあります。子どもたちは、慣習的な音響の世界の中で、言葉を学ぶと同時に、音声を音響を、そして動作を、周囲の人々が容認されるあり方でまとめる方法を習得しています。日常の実用的なやりとりの中で培われた、このような音楽的表現法こそ、子どもたちが将来、自身の言葉で音楽づくりをするための源となると考えられます。

（国立音楽大学）

注

1 事例1、4は、筆者と国立音楽大学幼児教育専攻卒業研究グループが、東京都東大和市にある、こひつじ保育園において、一九九七年度に行った、〇歳児クラスの子どもたちの音楽行動の研究の資料に基づくものです。筆者と国立音楽大学幼児教育専攻四年の西本倫子、安森祐子が観察を行いました。

2 筆者と国立音楽大学幼児教育専攻卒業研究グループが、東京都東大和市にある、こひつじ保育園において、一九九三年に行った、五歳児クラスの子どもたちの音楽行動の研究の資料に基づくものです。筆者と国立音楽大学教育専攻四年の松井久美、山本綾子が観察を行いました。